

Kurt Flasch:  
*Nikolaus von Kues.*  
*Geschichte einer Entwicklung. Vorlesungen*  
*zur Einführung in seine Philosophie*  
 Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1998, pp. 679

八 卷 和 彦

2001年のニコラウス・クザーヌス生誕600周年を間近かに控えるなか、中世哲学の研究において独自の世界を築いてきた碩学フラッシュが、クザーヌス研究の分野において公刊した大著が本書である。既に著者フラッシュは、1973年に“Die Metaphysik des Einen bei Nikolaus von Kues. Problemgeschichtliche Stellung und systematische Bedeutung” (Leiden) という研究書を著したことがあるなど、彼にとってクザーヌスの思想はたえず自己の研究対象であり続けた所である。以下では紙幅の関係から、この文字通りの大著を、評者の読後の印象に従いつつ、その内容をごく簡単に紹介し、さらに若干のコメントを付すこととしたい。

著者は本書を、クザーヌスの哲学の発生史的 (genetisch) 提示であるとしており、それを可能とする条件が近年に整えられたのだとする (S. 13f.)。その第一はハイデルベルク版全集で説教が年代順に校訂されて刊行されつつあることであり、第二は、“De docta ignorantia” (1440) “De coniecturis” (1442/3) の間に存在するクザーヌス哲学における変化が J. Koch によって明らかにされたことであり、第三には、E. Meuthen らの編集によってクザーヌス関連の包括的な資料集である “Acta Cusana” が刊行されつつあることであり、第五には、イタリアでの研究によって 15 世紀の全体像に関して新たな相が明らかにされていることである。特にこの最後の点への関連において、著者は自ら貢献するところがあると自負している。

さて、著者はクザーヌス哲学を発生史的に研究するに際して、五段階に区分せられる展開を見出す (S. 42)。第一は、1430年から1432年間の諸説教における、比類をみない哲学的思惟の徹底。第二は、1440年ごろの “De doct. ign.” 執筆時における

思考の第一の体系化。この段階では超越が強調されていることを特徴的とする。第三は、(著者は時期を明示することを避けているが) “De coniecturis” 執筆の際に到達した新たな思惟。即ち、〈coincidentia〉の思想の適用領域を、神的領域から知性的領域へと転換したことに伴い、人間の認識能力としての知性 (intellectus) がより高く評価されるようになったことを指摘する (S. 159ff.)。第四は、1450 年頃に到達した、神という一性は自らを世界に示すという思想。この展開の中でクザーヌスは日常世界および自然研究等に関心を深めたとする。第五は、純粋な〈可能そのもの〉についての哲学において、思考の前提をラディカルに絞り込むことになり、それが最晩年の啓蒙的哲学探求の段階へつながっているとする。

このような前提に立って自説を展開するにあたって著者は、教壇で自由に語るというスタイルをもって記している。そして全篇を貫く中心的テーマは、クザーヌスの思想的生涯における〈coincidentia oppositorum〉の思惟の展開の跡付けである。それに際して著者は、従来のこの思惟についての解釈における三つの典型的なタイプを、以下のように批判的に摘出する。第一は神秘主義的解釈とされるものであって、それはこの思惟を、神秘的経験への導き、或いはそれについての叙述とみなす。第二は、キリスト教神学における解釈であって、それは〈coincidentia〉の思惟がキリスト教信仰を前提にしているとするので、クザーヌスにおけるこの思惟を信仰の權威の下に制限することになるか、またはこの思惟を神の特性とだけみなすことになっていると、著者は捉える。第三は、この思惟を単に「反対の一致」とだけ解釈しようとするものであって、これはクザーヌス自身がこの思惟をもって試みた新たな地平を見逃すことになるとする。これらの解釈に対して著者はこの思惟を、論理学における四種の対当の全ての意味が込められて使用されているのであり、そこにこそクザーヌスの意図が存在したとする (S. 60)。

このような前提的把握に立つ著者は、既に言及したクザーヌスの思考発展の第三段階をとりわけ重視する。即ち、“De doct. ign.”と“De coniecturis”の間に存在する思惟の変化であり、そこでクザーヌスは〈coincidentia〉を、神的なものとしてのみならず知性的なものとしても考えるようになっていくとする (S. 158ff.)。

著者はさらに、このクザーヌスにおける新たな思惟は、人間が知性的存在である限り、人間もまた〈coincidentia〉であると理解されることになっていると指摘する。ここから著者は、1450年に著わされた、人間の精神的能力を一層肯定的に評価する著

作である“De mente”を重要視して、これを“De concordantia catholica”, “De doct. Ign.”, “De coniecturis”と並ぶ「主要著作」とみなすべきであるという (S. 288)。なぜなら、人間の精神の働きにこそ、クザーヌスの認識論の基本構造としての〈内に戻るために外に向かう〉という〈coincidentia〉が存在するからである。そして著者は最終的に、クザーヌスの〈coincidentia〉の教説は哲学的神論の最終段階に不可欠なものであって、単なる遠く離れた神の特質としてではなく、世界を解明する鍵としてとらえねばならない、とまとめるに至る (S. 610)。

以上のような著者による〈coincidentia〉の思惟についての理解には、評者もその大筋において賛同できる。しかし一点だけ付言しておきたい。即ち、著者の〈coincidentia〉の思惟に対する理解は、なお未だ水平的であって、これを成立させている場が立体的に把握されていないのではないかと、いうことである。今、この点を詳述することはできないが、クザーヌスにおける〈coincidentia〉の思惟は〈concordantia〉(協和)の思惟によって支えられているのであり、またそれから要請されているものであるという事情が存在すると、評者は考えているのであるが、この点への目配りが、著者には不十分であるように思われるのである。

次に、評者が大いに意を強くした点の一つ挙げたい。それは著者による“De pace fidei” (『信仰の平和』) についての理解である。〈una religio in rituum varietate〉という、この書物の鍵をなす文言を、著者は端的に「現存する諸宗教は一なる宗教の内部における多様な儀礼である」と解釈している (S. 340)。同時に著者は、〈rudes〉(民衆) という語に注目すると共に (S. 345)、本書における登場人物たるギリシア人の賢者、イタリア人の賢者、アラブ人の賢者、それに御言等が、イディオータ篇における〈idiota〉の役割を担っているとみなしているのである (S. 349)。これは評者自身が『中世思想研究』24号に掲載された小論でとった視点であるが、それがこの大家によって改めて裏付けられたことになるのである。このような著者の理解を可能にしているのは、著者があくまでも〈キリスト教神学〉とは区別されたものとしての〈哲学〉という立場から、(時に過激にさえ映るほどに) 徹底的に思考しぬこうとしていることに他ならないと思われる (S. 54)。

ただし、この“De pace fidei”についての著者の解釈の中に、一つ物足りなさを感じるものが含まれていることも記さざるをえない。それは著者が、この書物には〈coincidentia〉の思惟を求めても見出すことができないが、それはこの書物の目的

に由来しているものであり、だからと言ってクザーヌスがこの思惟を断念したわけではないことは、引き続き書物が明らかにするであろう、としている点である (S. 344)。事実そのものは著者の指摘のとおりであるが、その根拠はこの書物が「諸宗教の平和」という目的のために著わされたということだけではなく、むしろより根本的なこととして〈concordantia〉の思想がここに姿を現しているのだと理解すべきであろう。上でも指摘したように、著者がこの点を十分に考慮していないので、このように例外として処理しなければならなくなっているのであろう。

最後に、本書の論展開における方法について言及しておきたい。論争的な思想家としても有名な著者は、その豊かな学識と深い思索に基づいて、従来のクザーヌス研究のあり方を批判的に概括した上で (S. 273; S. 307 etc.)、自説をこれらとは異なる新たなものとして展開するという論法を取っている。その多くは評者にとっても有益であった。とりわけ S. 121ff. の七点にわたるクザーヌス解釈の方法的確認にはまったく賛成である。

しかし、著者の主張の中には、いささか性急にすぎて十分な根拠が読み取れないものも少なからず存在することに、評者は気付かざるをえなかった。たとえば、上掲の著作“De mente”に登場する「哲学者」について、この哲学者は典型的にスコラ的ではないから、パリ大学とは関係のない、イタリアの〈クワットロチェント〉の典型的な人物とみなすべきであるという主張がなされているが (S. 271-74)、なぜここであえてパリ大学との関係を排除しなければならないのかは不明である。両方の要素は並存しうるはずであり、その方が、著者が再三にわたって指摘する (例えば S. 122) 歴史的データとしてのテキストという観点からみても、自然であろう。なぜなら、著者も認めているように (S. 253) この著作における対話者たちは、いずれも Typen として描かれているからである。従ってこの著者の主張は、著者が独自かつ新たに〈クワットロチェント〉に注目しているのだ、という自己主張に過ぎないように思われるのである。また些細なことではあるが、講義という形態で論述したためか、誤植および節番号の重複等の技術的な不手際が少々目につくことも、付言しておきたい。

以上、いくつかの疑問と批判も交えつつ紹介してきたが、中世哲学研究の泰斗によって著わされた浩瀚な書物として、本書が大いに有意義な内容をもつものであることは論をまたないところであり、クザーヌス生誕 600 周年を控えて、後進によるクザーヌス研究にも多大な影響を与えるに違いない。